

龜谷  
行編

脩身兒訓

三

K110.1  
31  
3

脩身見訓卷之三

龜谷行編

第一章

立志

○道近しと雖ども。行うさまは至らぬ。  
事小なりと雖ども。為さずを成らぬ。韓詩

外傳

○有志の士は利又は如し。百邪辟易也。  
無志此人を鈍刀の如し。童蒙侮翫也。言志

○人事百般を盡く遜讓を要す。但志を師に讓らざるべく。又古人に讓らざるべし。同上

○馬援曰く。丈夫の志たる。窮してハ益堅まるるを。老てハ益壯なるべし。

第二章 勉強 愛日

○陶淵明の詩に曰く。盛年を重て來ら

ど。一日を再び晨かり難し。時を及びて當り勉勵をべし。歲月を人を待たず。

○勃古斯敦曰く。我、他人より一倍の光陰を用る。一倍は勞苦を爲さば。必以他人乃成せる事業を成し得べし。歐米立志金言

○光陰の重んじべきを。知るとき。定期を愆らざるの習。自々と生じべし。同上

○禮諾爾圖曰く。辛苦此事を卓絶の才

不進むべきの道なり。絶妙の地位を辛  
苦の人比獲べき恩賞あり 同上

○常小勞作して已まど。職業の繁多か  
るを嫌ふ。世務不任。他人と交通し。  
實事不砥礪する。人生比主義なり。西洋

品行論

○を一事の成就せんことを望まば。自  
ら往て夫を爲すべし。も一事比成

就せんことを望まざれば。他人イハソケに

すべし。歐米立  
志金言

○那比爾ナビル曰く。困難愈甚しければ。愈多  
く勞苦を爲さべく。危険愈甚しければ。

愈多く勇氣を顯さべし。同上

○勤勉の人を。萬物を化して。黄金と爲  
すの術あり。光陰と雖ども。亦之を黄金  
に化さべし。同上

第三章 學問

○嘉肴ありと雖も。食をざせむ。其旨を知らざる也。至道ありと雖も。學をばれむ。其善を知らざる也。禮記樂記

○朱子曰く。學問の道敢て自りて是なりとせず。虚くして以て人より受む。自ら得ることあり。

○又曰く。學を爲すは。須らく今は是

みして。昨の非あるを覺ゆべし。日子改め月も化して。便ち是長進也。

○薛文清曰く。他事をして。學を好むの心も勝とせむ。必だ進むことあり。

○倪文節曰く。書を觀るは。一卷あるを。一卷の益あり。書を觀ること一日を。一日の益あり。

第四章 交際

○荀子曰く。我<sub>レ</sub>を非<sub>レ</sub>やま<sub>レ</sub>る者ハ吾<sub>レ</sub>ガ師あり。我<sub>レ</sub>を是<sub>ト</sub>して當<sub>ル</sub>者<sub>ト</sub>。吾<sub>レ</sub>ガ友あり。我<sub>レ</sub>ハ諂<sub>レ</sub>諛<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>る者ハ我<sub>レ</sub>ガ賊あり。○善人<sub>ト</sub>璞玉<sub>ノ</sub>如<sub>ク</sub>。惡人<sub>ト</sub>錐鑿<sub>ノ</sub>如<sub>ク</sub>。玉<sub>ハ</sub>錐鑿<sub>ヲ</sub>經<sub>ス</sub>ざ<sub>レ</sub>ば。器<sub>ヲ</sub>を成<sub>ス</sub>ざ<sub>レ</sub>ど。凡<sub>ソ</sub>我<sub>レ</sub>を毀<sub>ル</sub>者<sub>ハ</sub>。乃<sub>チ</sub>我<sub>レ</sub>を成<sub>ス</sub>者<sub>也</sub>。紳瑜

○小人固より當<sub>ル</sub>遠<sub>ク</sub>べ<sub>シ</sub>。然れども亦顯<sub>ニ</sub>お<sub>シ</sub>仇敵<sub>ト</sub>な<sub>レ</sub>ば。盈<sub>カ</sub>か<sub>ラ</sub>ず。君子固

と<sub>レ</sub>當<sub>ル</sub>親<sub>ヲ</sub>む<sub>レ</sub>る<sub>也</sub>。然<sub>レ</sub>ども亦曲<sub>テ</sub>附和<sub>ス</sub>べ<sub>シ</sub>と<sub>ラ</sub>ず。願體集

○事<sub>ヲ</sub>を人<sub>ノ</sub>問<sub>フ</sub>ハ。虚懷<sub>ヲ</sub>を要<sub>ス</sub>。毫<sub>モ</sub>挾<sub>ミ</sub>所<sub>ア</sub>る<sub>ベ</sub>から<sub>ズ</sub>。人<sub>ノ</sub>替<sub>テ</sub>事<sub>ヲ</sub>成<sub>ス</sub>處<sub>ニ</sub>を<sub>レ</sub>る<sub>ハ</sub>周匝<sub>ヲ</sub>を要<sub>ス</sub>。稍<sub>モ</sub>缺<sub>ク</sub>所<sub>ア</sub>る<sub>ベ</sub>から<sub>ズ</sub>。言志錄

○人<sub>ノ</sub>談話<sub>ヲ</sub>を<sub>レ</sub>る<sub>ハ</sub>。屢<sub>ニ</sub>を<sub>レ</sub>る<sub>也</sub>。長<sub>ク</sub>る<sub>ベ</sub>から<sub>ズ</sub>。長談<sub>ト</sub>人<sub>ヲ</sub>を倦<sub>マ</sub>し<sub>メ</sub>。人<sub>ノ</sub>嫌<sub>ハ</sub>る<sub>也</sub>。

智氏  
家訓

○人と論ぎるハ。須らく容貌従容。言語  
温厚なふべし。決して劇烈な言を  
出さず。紳瑜

○人乃詐りを覺るも之を説破せよ。其  
自ら愧る我待て可なり。若し夫は愧を  
知らざる人ハ。又何ぞ責めん。金言

○人の小過を責めば。人死陰私を發り

此。人の舊惡を念はず。三乃者を惟以て  
徳を養ふはとみるは。亦以て害を遠く  
くべし。遵生ハ牋

○年高くとまき徳なく。貧極りて恥なく。  
兇惡みして禮を顧みば。愚謬みして禮  
を明みせば。此四等の人を。與に較むる  
を習是編

○一坐の中。好て言を以て人を彈射を

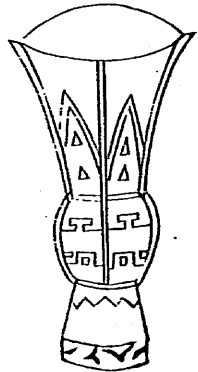
ふ者あまた。吾宜く端坐沈黙。以て之  
を銷を<sup>願</sup>。此哉不言の教や謂ふ。願體

○人此私語を見てハ。耳を傾て竊に聽  
く夫と勿き。人此私室に入りてハ。目を  
側て旁觀をるこを勿<sup>同上</sup>。

○隣家喪あはれむ。快飲高歌を<sup>申</sup>らば。  
新喪の人と對し。劇談大笑を<sup>申</sup>べらば。申

○薛文清曰く。郷人子處をる。皆當に敬

# 觚不觚



# 觚哉觚哉

一之を愛をべし。

三尺の童子と雖ども。亦當に誠心を以

て之を愛すべし。侮  
慢をべららば

○又曰く。人の微賤  
に於る。皆當に誠敬  
を以て之を待つべ

修身略語

光風社藏版



一。忽せよ。慢るべからず。

○子弟僮僕、人とあひ争ふ者あきば、只自うら戒飾を行ふべし。怒我別人より加ふべり、あらず。金言

第五章 處事

○事を做す。最も宜く熟思緩處を盡し。熟思を盡す其理を得。緩處をれば其當を得。紳瑜

○遠路に書札を寄するに、當り前夕に於て之を成すべし。發するに臨み、匆々之を成せば、必に遺漏多し。金言

○人の書畫を借り、損汚遺失をべからず。閱し畢らば、即ち還すべし。借書中、偽字あきば、隨て別紙を以て記出し。本條の下に置くべし。同上

○貝原益軒曰く、盛怒の時、小方り、慎で

妄小簡を與へ。言を發とること勿れ。之を妄おすまば。必だ悔あるを。

○許平仲曰く。盛怒の時小於て。堅く忍ひく動りず。心平あるを俟ち。審おし之に應ぐ。庶幾くハ失なす。

○徑路窄き處ハ。一步を留め人小與へて行り止め。滋味なる時ハ。三分を減下。人小譲りて嗜まむ。此ハ是世我渉る

の法あり。習是編

第六章

治産

○彌爾列爾曰く。工事を勤むるハ。たとひ極て勞苦の業多りとも。中ハ無量の樂趣充滿以。又自らと此身を進修する所以の具あり。歐米立志金言

○たとひ卑賤ある辛苦乃職業よりとも。毎日其の定課を完うたらんハ。

と此他の時間も盡くみる甜美なるを  
覺ゆべきなり。同上

○辛苦して賤工を為し。艱難して衣食  
得るハ。百事具足し。枕を高之して。眠  
るに比を汝ら。更ニ幸あり。同上

○正直に生業を為し。人に害を加へば。  
己に属せざる物也。之を其主に還さべ  
し。同上

○和睦勤儉なる者也。家必ぞ隆え。乖戾  
驕奢なる者也。家必ぞ敗る。此理。券を操  
るが如し。断々爽たず。且之を驗するも。  
甚と速りなり。金言

第七章 安分

○譚子曰く。奢る者も富めても足らば。  
儉なる者も貧乏くても餘あり。奢る者も  
心常に貧しく。儉なる者も心常に富む。

○分も過ぎ福を求めた。適<sup>く</sup>以て禍を速  
めん。分も安ん<sup>ど</sup>禍<sup>を</sup>遠<sup>く</sup>せむ。將<sup>ふ</sup>  
自ら福を得んと以。紳<sup>瑜</sup>

○人の一生を路を行くが如し。一歩<sup>も</sup>

進むとや<sup>を</sup>以て。足れりと<sup>を</sup>べし。歐米立  
志金言

○伯氏<sup>ノ母アト</sup>曰く。吾<sup>が</sup>富<sup>む</sup>む。吾<sup>が</sup>産<sup>業</sup>の大<sup>か</sup>  
るも非<sup>ど</sup>して。吾<sup>が</sup>需<sup>用</sup>の少<sup>き</sup>もあり。

第八章 倫常

○白虎通<sup>ハ</sup>曰く。三綱<sup>と</sup>何の謂<sup>ぞ</sup>や。

君臣父子夫婦を謂<sup>ふ</sup>なり。君は臣に綱  
なり。父は子に綱<sup>なり</sup>。夫は妻の綱<sup>なり</sup>。

○孟子曰く。父子親あり。君臣義あり。夫  
婦別あり。長幼序あり。朋友信あり。

○具原益軒曰く。孝は百行の本あり。故  
ふ人として孝あり<sup>を</sup>終<sup>む</sup>。其本先<sup>に</sup>絶  
ゆ。他の善行良才ありと雖<sup>も</sup>。觀<sup>る</sup>も

足らざ。

○曾子曰く。父母之と愛をせバ。喜て忘れバ。父母之。我惡めた。懼て怨むるし。父母過ち有せバ。諫く逆えず。

○程伊川曰く。病て牀に卧し。之を庸醫が委ぬるハ。不慈不孝に比せ。親に事ふ者も。亦醫を知らぬる可うらば。

○父母は其子の顯榮を以て。己の幸と

為す。故に子とる者。其恩を忘は。惡業を行ふ。父母をして憂ふや。ここを勿は。勸善

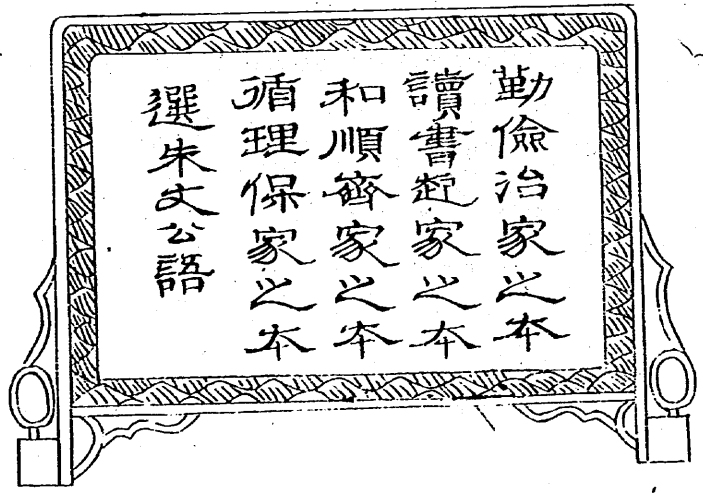
蒙訓

○兄弟と過失ありとを。互に慎んで之を隱諱を盡し。同上

○人。友悌を欲せバ。一身の欲を抑制し。常に兄弟姉妹を惠愛し。其益を思ふこと。猶己の益を欲するがごとくをべし。同上

○族人と皆其祖先  
 と同うし。共ニ一家  
 我レ為レとレのレなり。故  
 小ニ互ニ親愛シ。互ニ  
 保護シ。其家名を損  
 せズ。之レ我子孫ニ傳  
 ふべし。同上

○人其國を愛敬す



若し國ニ於テ非理の事を為すと雖  
 ども。我レ之レを怨ミて。其害我ニ為スべクなり。上同  
 ○谷グ惹レ西セ曰く。我レが財貨。我レが性命ハ。我  
 小ニ属スる物ニあり。其レ實ニも皆我レが國  
 小ニ属スするものなり。歐米立  
 志金言

第九章 厚德

○陳幾亭曰く。人ニ周ラす教ニを樂ミむ者

は。自うら奉ずるふと必む薄し。身不奢

ふ者也。恵むの親不及む也。畜徳録

○呉懐野曰く。其心厚た者も。其福厚し。

其量弘き者も。其徳弘し。日計足らざる

とも。月計餘りあり。同上

○人乃短を匿はむ。人の急を去くもど

るハ。仁義の人非ざる也。同上

○君子能く人の危きを扶け。人乃急を

去くふ。固く是美事なり。誇らざるを

益善し。願體集

○恩を施すと雖ども。後其報を得ん

とむるの念ある者ハ。善を行ふにあら

ず。唯恩を交換はるの之。之を稱譽する

不足らむ。勸善訓蒙

○人も己の産業と。他人に窮乏を比

較し。以て恩を施さず。同上

○小人専ら人此恩を望む。恩過ぐせば感ぜば。君子輕く人の恩を受ず。受くれば忘る難し。紳瑜

○我人功あまば念ふべからず。而して過ちを念ふざる處からず。人我の恩何れぞ忘るべからず。而して怨を忘る處からず。同上

○薄福の者を必ず刻薄あり。刻薄をれば福更に薄し。厚德の者を必ず寛厚あり。寛厚をれば徳更に厚し。同上

○貧者の悲叫を聞きて。感動をざる者い。真に薄情と謂ふ也。他日己が悲し叫ぶことあらん時。人之を聞きて。憫まざる也。勸懲 雑話

○汝他人を恤まひ。人も亦汝を恤まん。汝善く他人を遇せば。人も亦善く汝を



遇とん 同上

○孔子曰く。善を為す者ハ。天之所報する福を以てし。不善を為す者ハ。天之所報する禍を以てす。孔子家語

○陰徳ある者ハ陽報あり。陰行ある者ハ必以昭名ある。淮南子

○父母善を積めむ。子孫家を固くし。父母善を積まざれば。子孫家覆む。勸懲雜話

○善ハ善報あり。惡ハ惡報あり。善惡報あるを。時節未ど至らば。事林廣記

○劉宗周曰く。一時人を勸するハ口を以てて。百世人を勸むるハ書を以てて。善本を刊刻し。廣く流布をなす。亦人と善をなす乃一端なり。劉氏人譜

第十章 躬行

○薛文清曰く。天地と吾が父母あり。凡

そ行ふ所あきむ。吾<sub>レ</sub>父母の命も順ふこ  
とを知多のえ。其他を恤ふるも違所ら  
んや。

○又曰く。天を敬むること。當り吾<sub>レ</sub>の心  
を敬するより始む。其心誠敬する  
こや能はむと云。能く天を敬すと謂ふ  
者を妄あり。

○胡文定曰く。心を立つるは。忠信も

ある。欺るざるを以て主本といふ。

○孝悌忠信を身を立てるの大本。禮義

廉耻を己<sub>レ</sub>を行ふの先務あり。省心  
雜言

○坡可羅<sup>ボックル</sup>曰く。智識は日新進動の活物

あり。道德は萬世不易の定則あり。

○難も臨まざれば忠臣の心を見れば財

も臨まざれば義士此節を見ず。省心  
雜言

○丈夫一生廉耻を重しといふ。切り人

求る勿き。死生命あり。續小児語

○凡と児童ハ。須らく是衣冠整齊。言動端莊あるべし。蕪耻の二字を識り得き

バ。自然子正大光明の氣象あり。言行彙纂

○子貢問て曰く。一言ホ―て以て身を終るまで之を行ふ能き者ありや。子曰く。其怒る。己レが欲せざる所ハ。人ハ施すを勿れ。

○中庸ホ曰く。忠恕道を違ふると遠からズ。諸哉己レハ施して願を乞ふ。亦人ハ施すあや勿き。

○朱子曰く。己レが心を盡きを忠とをし。己レ推して人ハ及ばざるを恕と為す。

○司馬溫公嘗て言ふ。吾人ハ過ふ者あり。但平生為る所の事。人ハ對して言ふべからざる者あり。劉氏譜

○省心録子曰く。晝の為に所ハ。夜必<sup>ニ</sup>之を思ひ。善あま<sup>ニ</sup>バ樂ミ。過<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>バ懼る。君子<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>哉。

○一日の中。或ハ一善言を聞<sup>ク</sup>。一善行を見。一善事<sup>ヲ</sup>行<sup>ハ</sup>バ。此日虚<sup>ク</sup>度<sup>ラ</sup>ら<sup>ズ</sup>。紳瑜<sup>ト</sup>。

○衣垢きて洗<sup>ハ</sup>ズ。器缺て補<sup>ハ</sup>ズ。人<sup>ノ</sup>對<sup>シ</sup>て猶<sup>ホ</sup>慙<sup>ル</sup>色あり。行垢<sup>ヲ</sup>洗<sup>ハ</sup>ズ。



德缺て補<sup>ハ</sup>ズ。天<sup>ノ</sup>對<sup>シ</sup>て豈<sup>シ</sup>愧<sup>ル</sup>心無<sup>ク</sup>らんや。樵談  
○程子曰く。言語を慎<sup>ミ</sup>。以<sup>テ</sup>其德を養<sup>フ</sup>ひ。飲食<sup>ヲ</sup>節<sup>ス</sup>。以<sup>テ</sup>其體を養<sup>フ</sup>事<sup>ノ</sup>至<sup>リ</sup>近<sup>ク</sup>。以<sup>テ</sup>繫<sup>ル</sup>所

至大なる者々。言語飲食小過ぐるハ莫し  
 ○富貴ハ傳舎の如し。惟謹慎を志む久  
 く居ふことを得難し。貧賤ハ敝衣の如  
 し。惟勤儉を志む以て脱卸をべし。習是編  
 ○家長禮を知らば。男女勤儉衰門と雖  
 ども亦必ず興るあり。其一時の貧富ハ  
 未だ論ぜざるに足らば。紳瑜  
 ○政を為るに要あり。公と曰ひ。清と曰

ふ。家を成すに道あり。儉と曰ひ。勤と曰  
 ふ。省心  
 雜言  
 ○司馬温公曰く。凡そ諸の卑幼。事大小  
 となく。専らよ行ふことを得る毋を。必  
 だ家長に咨稟せよ。  
 ○自ら重んぜざる者ハ辱を取り。自ら  
 畏まざる者ハ禍を招く。自ら満たばる  
 者ハ益を受け。自ら足せりとせざる者

て聞茂博く此。頌體集

○門内嬉笑怒罵を聞くこと罕きか止む。其家範知るべし。座右多く名語格言を書き置ば。其志趣知るべし。同上

○揚慈湖曰く。智ある者ハ問を好て樂み。智なき者々自ら用ゐて憂ふ。畜徳録

○人の小過を責めば。人乃陰私を發せど。人の舊惡を念たざるを。真し是妙人

かま 紳瑜

○忍を亦辨あり。勢を畏せて忍ぶ者ハ忍と為さば足らぬ。畏る可きの勢無くして忍ぶ者ハ。是を真し忍と爲し。同上  
○人より恩を受けむ。必だ之を報ゆべきこと。猶人より借りたる金貨銭還を  
勸善訓蒙

第十一章 警戒

○荀子曰く。人ハ三の不祥あり。幼ハ一  
 不敬。長ハ事へズ。賤ハ去ク。敢テ貴ハ  
 事へズ。不肖ハ一。敢テ賢ハ事へざる  
 也。是人乃三不祥なり。

○不肖を以て人を待つ。愚者と雖ども  
 甘んぜば。非禮を以て人我處也。賤者と  
 雖ども亦怨む。習是編

○食を節せず。疾ふ。言を擇べぬ

禍あり。禍の生ずるは。天より降る。おあ

らぬ。皆其口より也。西疇常言

○凡そ宴會賓客雜坐ハ。質疑問難の時  
 非也。詩文を講説し。自ら博雅を誇る  
 處あらす。恐らくを知らざる者之を恨  
 ん。金言

○古人の是非を品評するハ可あり。今  
 人乃善惡を妄議するハ不可あり。恨

我取る事と。多くハ妄議不在り。言志録

○才を猶劍のごとし。善く之を用ゐれど。以て身を衛るべし。善く之を用ゐれば。以て身我殺す事足る。同上

○人此癖を擬するハ。卑夫の好む所にして。大人長者の賤しむ所なり。計らざるの禍を生むることをあらん。智氏家訓

○人の善を聞て疑ひ。人の惡を聞て信

ト。好て人此短を説き。人の長我計らむ。其人平生必び惡ありて善を願體集

○我ガ人小如らざるを怨むる我休よ。我小如らば者尚衆し。我ガ人小勝ると誇ふを休よ。我小勝る者還多し。紳瑜

○常に虚誕を説く者も。時ありて信誠のちとを言ふと雖ども。人之を信ぜ以上同  
○大酔も人の不善を増むる非ず。



更み人をして。心み有せざるの不善を

生ぜしむ。勸善訓蒙

○朝も志て食もどど。晝もして饑を

少くして學をどど。壯もして惑ふ。饑

る者ハ猶ホ恐ぶべし。惑ふ者ハ奈何とを

す。加らば。言志録

○安逸を恣もまきば。己グ失を増し。才

能を恃めば。人の嫉を招く。静寄軒文集

○我如し善を為せば。一介の寒士と雖

ども。人の其徳も感ぜらるあり。我如し惡

戎為せば位人臣を極むと雖ども。人乃

其過ちを議する有る。紳瑜

○人の貴賤を論ぜば。一日當さず作す

べきの事あり。若し飽食煖衣して。事を

事とせむんば何ぞ好結果あるを得ん。

願體集

修身見訓卷之三 終

明治十三年十一月廿五日版權免許 第廿三丁裏七行  
同 十四年五月二日出版 目重複アリ再版  
同 十五年五月卅一日再版 三付改正ス

編者出板

東京府士族光風社長

龜谷行

東京下谷御徒町一丁目六十七番地

柳原喜兵衛

大坂北久太郎町

牧野善兵衛

東京芝口一丁目

吉川半七

同 南傳馬町二丁目

石川治兵衛

同 馬喰町三丁目

三

幾兒

定價八錢五厘

龜谷  
行編

脩身兒訓

四

K110.1  
31  
4